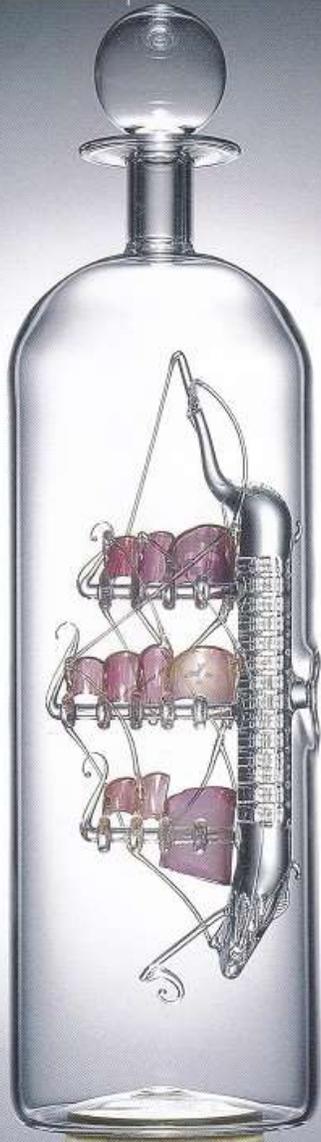


現代社会の最先端で活躍されている方々のメッセージをてがかりに、「現代」の課題を共有し、確かな時代の方向を探るコラム・論考集

「現代」を考える

あんじやり
June 2018
Number
añjali 35



イスタンブール・聖ソフィアでの祈り

林佳世子
hayashi kayoko

(1) はじめに

複数の宗教がひとつの空間を共有することの難しさは、あえて強調するまでもないだろう。パレスチナでも北アイルランドでも、それが引き起こす根深い対立は、譲歩を引き出すことの難しい問題として、人々を苦しめている。しかし実際の歴史のなかでは、住民が一つの宗教に統一されている例のほうが、むしろ少ない。ローマ時代までの多神教から一神教の信仰へと移り、さらに同系のユダヤ

教、キリスト教、イスラム教が、一つの空間を分かち合ってきた中東地域では、一つの都市、一つの宗教施設に、宗教をめぐる濃厚な歴史がしみ込んでいる。

しかし、それらは、他者が思うほど対立的なものであったとは限らない。例えば、筆者がイスタンブールのアルメニア正教スラブ・ケヴォルク教会を訪れた時の体験を紹介したい。年老いた、腰の曲がった女性が礼拝をしている。その振る舞いがイスラム教のそれだったので、少し驚き、「イスラム教の方で

はないのですか」と問うと、女性は、「ええ、でも、モスクは男が多く、混んでいるのでね。神は同じだから、私はここで」と言うのだった。こうした振る舞いは、おそらく、近代的な、正規の教育をうけた人々の間にはあり得ないだろう。しかし、「神は同じ」という言葉は深い印象を与えるものだった。そうした宗教の混在・共存が中東の多くの地では長く続いてきたことを知るならば、その一種のあいまいさが今日失われ、断絶の憂き目を見ていることに心が痛む。

「あいまい」でしかあり得ない状況を理解するため、一つの例として、イスタンブルの聖ソフィアの例を紹介しよう。元来は東ローマ帝国のもとで建設された教会である。宗教の対立と民族主義の間で、現在は博物館という法的地位をもつこの建物は、今日、この世に存在し続けていること自体がひとつの奇跡ともいえる記念碑的遺構である。ここでは、その歴史を見てみよう。

(2) ビザンツ時代

聖堂として聖ソフィアが、現在の地に最初に建設されたのは三六〇年コンスタンティウス二世の時代といわれる。紀元二―三世紀にキリスト教がローマ帝国の領域で広がり、三―三年の公認、三八〇年の国教化、さらに、東西ローマの分裂の流れのなかで、東ローマ帝国の首都を飾る施設が必要とされたためである。四一五年に一度、再建された建物は、その後、ユステイニアヌス帝のもとでおきたニカの反乱で失われる。この反乱のうち、体制を整えたユステイニアヌス帝は、教会の再建にとりかかる。ユステイニアヌス帝は、ビザンツ帝国の領域を地中海周辺に広げ、最盛期を現出させた皇帝である。

五三七年に完成した聖ソフィアであったが、間もなくドームが崩落し、ドームは架けならずキリスト教徒やユダヤ教徒の商人・職人によって賃貸されていた。また、十六世紀以後は聖ソフィアの周囲は、オスマン王家の墓所ともなる。五人の皇帝が、そこに葬られている。これは、オスマン帝国の宮殿に近い地の利もあつたろうが、「町一番」の権威が、そこに眠ることを期待させたためであろう。

実際、オスマン帝国時代の聖ソフィアは、皇帝が金曜礼拝に最も頻繁に訪れる場所でもあつた。かつてのキリスト教関連の備品が取り払われ、内部はイスラム教の信仰の実践に適した作り替えられた。メッカの方向を示すミフラーブや説教壇ミンバルの設置などがそれにあたる。エルサレムの方向に向いている聖ソフィアに、メッカの方角を示す装置が据えられることは、イスラム教徒にとって、歴史の前進・発展を可視化するものでもあつたろう。さらに座しての礼拝に適するよう絨毯が敷かれた。キリスト教の装置のうち、聖母マリアがイエスを抱く図や天使画、奇進を行うローマ皇帝・皇母らのモザイクからは、漆喰で埋められた。イスラム教が「偶像」を忌諱するためである。しかし、同地を訪れたヨーロッパからの旅行者らは、その像が漆喰の間からみえていたことを報告する。どれだけ厳密に「隠されて」いたかは、明らかではない。

替えられる。以後はその姿を変えることなく、雄大で荘厳な姿で、ビザンツの栄華を今日に伝える最高のモニュメントとなった。一旦は崩落したドームが建設の難しさを物語っているが、完成した直径三二メートル、高さ五六メートルのドームは、ローマの高い土木建築の伝統が受け継がれていたことを示している。しかし、ビザンツの歴史のなかでも、二度と同規模のものが建つことはなかった。このため、やがて、その存在は神格化されていく。すなわち、この建物の存在は神の意志であり、その建築を助けたのは天使であるとする信仰である。実際、建設時のエピソードは伝説化し、天使が聖ソフィアのなかに閉じ込められているというストーリーへと結実していく。第四次十字軍による略奪やオスマン帝国による包囲に際し、この町の人々は、この聖堂が聖なる場所であると信じ、神の加護を求めてこの建物のなかに逃げ込んだといわれる。

(3) オスマン帝国時代

しかし、その祈りがかなうことはなく、一四五三年にコンスタンティノープルは、イスラム教徒の皇帝（スルタン）メフメト二世が率いるオスマン帝国により征服され、ビザンツは滅亡する。メフメト二世は入城後、ま

また、ビザンツ以来の天使の伝説はオスマン帝国のもとに受け継がれ、新たなバリエーションを生み出していく。すなわち、天使にかわって建築を助けたものとして預言者フズルが登場し、預言者が偉大な皇帝による建設を助ける話として、あるいは、逆に、皇帝の力ではなく、神の力により建設がすすめられた話として、異なるヴァージョンをもつ伝承として、広まっていく。住民の多くが入れ替わっても、ビザンツからオスマンへと受け継がれたものは、数多い。

そして、ここからは確かめられることではないが、先にあげたスルプ・ケヴォルク教会の逆の例があつたことは、容易に想像される。町の住民の半数はキリスト教徒であり、彼らにとって、依然、聖ソフィアは奇跡の場であり、そこには今も天使が住むと信じられたのである。オスマン帝国を支えたイスラム教徒の多くは、キリスト教徒からの改宗者でもあつた。二つの宗教は、対立を含みつつも、あくまで身近なものであり排除し合うものではなかったからである。

(4) 近代

こうした聖ソフィアに大きく手が加わるのは、十九世紀のことである。オスマン皇帝アブデュルメジド一世の命をうけ、イタリヤの

もなく聖ソフィアを訪れ、ここをモスクとすることを決定する。イスラム教の信仰によれば、ムハンマドの前に人類に遣わされた預言者がイエスであり、イエスによるキリスト教の時代の次に、イスラム教の時代が訪れる。それゆえ、キリスト教の遺物をイスラム教の信仰の場に「発展」させることは、当然の成り行きであり、最後の審判の日に向かう歴史のプロセスの一コマに他ならなかった。イスラム教徒にとって、キリスト教の信仰の場は、不浄でも不吉でもないことは重要である。

聖ソフィアも、当然のごとく、モスク化され、町一番の重要な施設となった。同様にモスクに転用された教会も多かったが、ただし、同地の教会のすべてではなかった。イスタンブルの人口の半数以上はキリスト教徒であつたことから、彼らの手にも多数の教会が残されたためである。町の人口の半数がキリスト教徒である状況は、二十世紀まで変わらなかった。

「町一番」の聖ソフィア「モスク」には、オスマン帝国皇帝による奇進も集中した。現在も観光客で賑わう大バザールや、多数の巨大なキャラバンサライヤトルコ風呂が聖ソフィアの宗教奇進財とされ、モスクの運営やそこで行われる教育や貧民救済に当てられた。宗教奇進財の店舗は、イスラム教徒のみ

フォッササティ兄弟が建物を診断し、修復を手掛ける。建物に関する最も古い、近代的な記録は、この時に作成された。

フォッササティ兄弟は、聖ソフィアを測量し、建物内に皇帝専用の礼拝室を作るなど、建物の「近代化」に努める一方で、この建物の古典時代の姿についても多くの記録を残した。すなわち、一部の漆喰をはがして、教会時代のモザイクや壁画を記録したのである。同所を訪れたプロイセンの建築家ザルゼンベルグもまた、フォッササティ兄弟の調査に基づき記録を残している。モザイクは、その後また漆喰で覆われることになるが、これらの記録はこの建物への興味を世界中で喚起した。ただし、兄弟の兄ガスパーレ・フォッササティが著し、オスマン帝国皇帝に献上された、多数の石版図を含む「聖ソフィア・コンスタンティノープル」(一八五二)には、キリスト教関連の図はまったく含まれていない。

この時代は、ヨーロッパとの対抗のなか、オスマン帝国が変容を開始した時代でもあつた。アブデュルメジド一世のオスマン帝国は、ギェルハネ勅令で法治国家であることを宣言し、その後、イスラム教徒・キリスト教徒を包括するオスマン国民の創設に向かう。しかし、やがてその試みは破綻し、帝国は、諸民族の離反・独立にさらされる。

こうしたなか、聖ソフィアもあいまいな存在ではあり得なくなる。独立したギリシャに生まれた「メガリ・イデア（大ギリシャ主義）」は、オスマン帝国領土の再編の動きのなかで欧米列強の支持を受け、アナトリア西岸のギリシャへの組み込みと、イスタンブールの「ギリシャ化」が現実の政治日程にのぼっている。第一次世界大戦のさなか、連合軍によるイスタンブールの占領は、こうした方向を實際に示したものであった。しかし、歴史は、トルコ民族主義の旗手となったムスタファ・ケマルの登場により急展開し、第一次世界大戦後のオスマン帝国の消滅・トルコ共和国の建国へと結実する。そのもつとで、聖ソフィアは、なお象徴的な意味をもった。

一九三五年、トルコ大国民議会により国父（アタテュルク）の称号を送られたムスタファ・ケマルは、まさに、この称号を送られた日に、聖ソフィアの博物館化を決定する。その背景は今日なお議論され、アタテュルクのサインが偽造されたものであるとする見解も、今なお根強く流布する。しかし、国家の近代化をめざし、社会におけるイスラム教の役割の制限を目論んだアタテュルクが、その権威が最高に達した時点において、聖ソフィアの博物館化を決定したことは、決して偶然ではないだろう。

後、長くイスラム教の祈りの場であった聖ソフィアは、民族・宗教の対立の火種となりにかかない。イスラム教に距離をおく一連の諸政策の一端で、アタテュルクのトルコ共和国は、ここを博物館として「非宗教化」し、二つの宗教の装置を並列して「展示」する場に変えたのである。

「博物館」化は、脱イスラムを国是のひとつとしたアタテュルクにとって、もつとも画期的で有効な解だった。

(5) 現在

しかし、民族と宗教の対立が一向に収まらず、むしろ、その断絶が社会全体を覆う二十一世紀において、聖ソフィアは、今なお、喧噪のなかにある。

トルコ共和国では、依然として、聖ソフィアの再モスク化の主張が繰り返されているからである。政府は、建物の裏側の一角をモスクとして活用することで、この問題は解決済みとしているが、イスラム主義の急進派勢力はその運動を活発化させている。現公正発展党内にも支持者がいることから、しばしば問題は表面化する。例えば、二〇一六年の断食月、明け方の礼拝の呼びかけにあたり、トルコ国営放送が聖ソフィアでのコーランの詠唱の映像を全土に流したことは、物議を巻き起

こした。一方で、これに抗議するギリシャ国内の論調も、挑発的である。

こうした状況は、教会に起源をもつ他のモスクにも影響している。長年、教会的な要素の扱いとモスクとしての活用問題で作業が滞っていたイスタンブールのパントクラートル修道院、オスマン時代のゼイレキ・モスクが、二〇一六年、修復を終え、美しい内装をもつモスクとして公開された。内部に教会の要素は見られない。今日の状況では、これ以外の答えは期待できないと思うのは、現公正発展党のもつとで、イスラム志向の強いポピュリズム政治が続いているからである。すでに、イズニクの町の聖ソフィアは、二〇一一年に、かつての博物館からモスクへ戻されている。

美しいゼイレキ・モスクのなかで、喜びを素直に表して礼拝をするイスラム教徒の人々を前に、ここを博物館とするという選択が、今のトルコでは難しいことを率直に認めざるを得ない。世界全体が「不寛容な時代」を生きている今日、せめて、ここに集う人々が教会であった過去にも寛容であること、さらに、その過去を大切にしようとする人々と空間を共有する心をもつことに期待したい。

(はやし かよこ・東京外国語大学総合国際学研究院教授
著書に「オスマン帝国五〇〇年の平和（興亡の世界史）」
(講談社)



アヤソフィア外観：写真は2009年に筆者が撮影したもの。



アヤソフィアの内部：写真は www.artlogue.net/ayasofia-istanblu より転載させていただいた。